

細石刃文化に礫群は存在するか

保坂康夫

1 中ッ原5B地点の遺構

本遺跡からは配石が2基出土している。石器分布の節で詳述されているが、著者も観察させていただいたので若干補足したい。配石No.1は、亜角礫で巨礫が割れたものらしい。配石No.2は亜円礫で一部に剥落がみられる。いずれにもマンガンないしは鉄分の厚い沈着層がみられ、No.1の割れ面やNo.2の剥落面を覆っており、割れや剥離が自然作用によることを示す。他にも人為的に加えられた痕跡はない。なお、沈着層の存在から礫層中から採取したと推定しうる。石質は両者とも八ヶ岳起源の安山岩と思われる。石器分布との関係を見ると、No.1がAブロック緑部の石器分布の粗の部分、No.2がAブロックのやや石器分布の密な部分の縁部に位置する。両者とも石器分布の高密度な部分には位置しない。

配石は、先土器時代の各時期各地域に普遍的に見られるようだが、本格的な論巧はみられない。著者は、特にブロックや礫群との位置関係に着目し、礫群に比べ多様であることから、生活のあらゆる局面で自在に使われたのではないかと¹⁾の推定を行った。本遺跡の配石のあり方も他の時期のものと明確な相異点が見当らないので、同様な使われ方をしたのだろう。

2 礫群存否の意味

ところで中ッ原5B地点の今回の調査では、礫群が検出されなかったことに着目したい。本遺跡にかぎらず、細石刃文化の遺跡では礫群が非常に希薄であるという認識²⁾がある。礫群は、単に調理用の施設という機能的側面だけでは、その存在意義を理解することはできない。礫群を用いる活動は、先土器時代集団の居住地の移動に伴う非日常的な活動であり、集団の紐帯強化のための社会的役割を負った存在の可能性もある。また、地域や時期で分布のかたよりがみられ、礫群から社会組織の違いを指摘できる可能性がある。以上の観点から、細石刃文化における礫群の存否の問題は、重要な視点となる。

3 細石刃文化の礫群報告例 ―相模野台地の事例―

近年の調査の進展で、細石刃文化の遺跡に礫群が報告される例が増加している。また、堤隆氏は、相模野台地の細石刃文化の様相を分析し、遺跡のセトルメントについて言及しているが、そ

の中で、礫群を保有する遺跡を類型の1つとして認め、これがかなり多く存在するとしている。³⁾
そこで、ここでは、相模野台地の礫を用いた遺構を取り上げてみたい。

相模野台地では、L1H上位、BB0、L1Sの三層にわたって細石刃石器群がみられる。L1Hでは、柏ヶ谷長ヲサ遺跡第IV文化層⁴⁾がある。非焼けの8点の礫があり、内4点は大型で配石とされている。また、代官山遺跡第III文化層⁵⁾では、32点の焼け礫が約10mの範囲から疎らに検出された。BB0では、10文化層ある。このうち、焼け礫の群集がみられるのは6文化層である。中村遺跡第II文化層⁶⁾では、79点で構成され、接合後10個体に複原された。石器分布と重複している。上野遺跡第1地点第III文化層第I群⁷⁾では、51点で構成される第I礫群がある。図から2点の配石を含むらしい。接合関係がみられ、石器群と重複する。第II群には、129点から成る第2礫群がある。図から2点の配石を含むと思われる。接合関係があり、石器群とも重複する。風間遺跡群第I地区第I文化層(b)⁸⁾では、1号から4号の4基がみられ、詳細な分析がなされている。石器群と混在して散漫な分布状況を示す点から、一般的な礫群とは異なるとし、「礫集中」と呼んでいる。1号～3号は近似した特徴を持つ。48点から89点で構成され、接合関係がみられる。重量分布グラフから、1点から3点の配石を持つと思われる。100g未満の礫が主住を占め、スス状付着物がみられる。接合後も完形に複原されるものは少なく、欠落礫の存在が推定されるなど、構成礫の特徴は、一般の礫群構成礫に近似しているとされる。1～3号礫集中は、石器群と重複し、構成礫中に磨石、敲石、石核などの石器を多く含む。4号礫集中は、16点から成り、100g未満の礫のみによって構成される。また、石器群とは重複しない。上草柳遺跡第1地点第I文化層⁹⁾では、2つのブロック内に7点と13点からなる礫群がある。それぞれ1点の配石を含むらしい。接合関係をもつ。上草柳遺跡第3地点中央第I文化層¹⁰⁾では、図より73点の礫群があり、1点の配石を含むらしい。いずれも一部が焼けているとされる。代官山遺跡第II文化層¹¹⁾では、8基の礫群が報告されている。焼け礫は合計68点、破損礫や接合関係もあるとされる。

この他、栗原中谷遺跡第I文化層¹²⁾では、拳大程度の10点と6点から成る2基の礫群が報告されているが、焼けの有無は不明である。深見諏訪山遺跡第II文化層¹³⁾では、4点から成る配石遺構状の礫群がある。焼けは不明である。長堀北遺跡第III文化層¹⁴⁾では、2～4点の焼け礫から成る礫群2基が報告されているが、上下動が激しく共伴性に乏しい。上和田城山遺跡第II文化層¹⁵⁾では、4区A・B・Cブロックと3区に石器群と重複して礫の分布がみられる。焼けの有無は不明で、配石を含むらしい。

L1Sでは、焼け礫の群集が3遺跡で報告されている。長堀北遺跡第II文化層¹⁶⁾では、5～10点からなる4基の礫群がある。うち3基が石器群と重複する。上野遺跡第1地点第II文化層¹⁷⁾では、10～49点の4基の礫群がある。いずれも石器群と重複する。また、C15グリッドの礫として、非焼け小礫の群集が報告されている。以上2遺跡は、削片系の細石刃核を伴う遺跡である。栗原中

第1表 相模野台地細石刃文化礫群出土遺跡・文化層一覧

遺 跡 ・ 文 化 層	生活面	文献	遺 跡 ・ 文 化 層	生活面	文献
代官山遺跡第III文化層	L1H	5	上草柳第3地点中央遺跡第I文化層	BB0	10
中村遺跡第II文化層	BB0	6	代官山遺跡第II文化層	BB0	11
上野遺跡第1地点第III文化層第I群	BB0	7	長堀北遺跡第II文化層	LIS	16
風間遺跡群第I地区第I文化層(b)	BB0	8	上野遺跡第1地点第II文化層	LIS	17
上草柳第1地点遺跡第I文化層	BB0	9	栗原中丸遺跡第II文化層	LIS	18

※ 文献の番号は註の番号と一致する

丸遺跡第II文化層¹⁸⁾では、台地内部に孤立したブロック1基内から、7個体41点の焼け礫が報告されている。2点の配石を含むらしい。また、他のブロックには9点の配石がみられる。

非焼け礫の群集では、上和田城山遺跡第I文化層¹⁹⁾で2基の礫群が報告されている。また、第1ブロック内に礫の分布がみられるが、大型で、配石と思われる。

以上のように、11遺跡14文化層で礫を用いた遺構がみられ、そのうち焼け礫の群集は9遺跡10文化層で28基みられる。5～129点と構成礫数に幅があるが、比較的小規模である。これらの共通の特徴は、平面分布が非常に散漫で、ナイフ形石器や槍先形尖頭器の文化に一般的にみられる密集型の礫群がみられない。また、石器群に重複するものが分布図に示された8遺跡19基中16基みられ、内11基は分布範囲や高密度部分の位置も重複するように見える。一般的に礫群は、石器群と重複する場合、分布範囲や高密度部分の位置を異にする場合が多い。この二つの特徴が、一般的な礫群と相異なる点である。一方、構成礫については、割れて接合するものがあり、接合後も完形に復原されないものがある点、スス状付着物がみられるものがある点、100g以下の礫が主体となる点など、一般的な礫群と近似することが報告されている例がある。

4 細石刃文化に礫群は存在するか

それでは、これらが礫群と認定できるであろうか。礫群は、主に拳大(500g前後)以下の焼け礫によって構成される礫のまとまりである。この定義からすれば、礫群と認められるものが含まれる。しかし、平面分布や石器分布との関係が一般的礫群と相異なることは、使用過程の違いなどを示す可能性がある。さらに、これらを全て礫群と認めても、相模野台地で報告された細石刃文化の遺跡32文化層中10文化層31%であり、関東・東海地域の槍先形尖頭器文化の礫群の保有率が²⁰⁾8割弱なのに比べて非常に低率である。また、現状では礫群の存在は相模野台地や上場遺跡、船野遺跡などの九州東・南部などの地域的な現象として見て取れる。相模野台地では、削片系細石核や船野型、野岳・休場型など多系統の細石刃文化がみられるが、いずれにも礫群がみられることになる。礫群活動の伝統が、変形しながらも、これらの地域で伝承されたとの見方もできる。

細石刃文化の中には、他にも配石や非焼け礫で構成される遺構がある。また、休場遺跡のよう

な石囲い炉の存在も指摘される。礫を用いた遺構がさらに多く見い出される可能性もあり、注意深い分析が望まれる。

註

- 1) 山下秀樹編 1985 『広野北遺跡発掘調査報告書』 P269
- 2) 辻本崇夫 1984 「細石器文化の遺構」『駿台史学』第60号 P111
保坂康夫 1986 「先土器時代の礫群の分布とその背景」『山梨考古学論集』Ⅰ P27
- 3) 堤 隆 1991 「相模野細石刃文化における石器装備の構造」『大和市史研究』第17号 P24
- 4) 柏ヶ谷長ヲサ遺跡発掘調査団 1983 『海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡』
- 5) 神奈川県立埋蔵文化財センター 1986 『代官山遺跡』
- 6) 中村遺跡発掘調査団 1987 『中村遺跡』
- 7) 大和市教育委員会 1986 『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』
- 8) 法政大学多摩校地域山地区遺跡調査会 1989 『風間遺跡群発掘調査報告書』
- 9) 大和市教育委員会 1984 『一般国道246号（大和・厚木バイパス）地域内遺跡調査報告書Ⅱ』
- 10) 註9に同じ
- 11) 註5に同じ
- 12) 栗原中谷遺跡発掘調査団 1990 『栗原中谷遺跡』
- 13) 大和市教育委員会 1983 『深見諏訪山遺跡』
- 14) 大和市教育委員会 1990 『長堀北遺跡資料編』
- 15) 大和市教育委員会 1979 『上和田城山』
- 16) 註14に同じ
- 17) 註7に同じ
- 18) 神奈川県立埋蔵文化財センター 1984 『栗原中丸遺跡』
- 19) 註15に同じ
- 20) 保坂康夫 1989 「礫群とブロックとの関わりについて」『山梨考古学論集』Ⅱ P43